

# 垂水史談会報

第 43 号  
2022 (令和4) 年  
1月発行 垂水史談会

## 【報告】

### 『和田英作画伯誕生地』碑を移設

『和田英作画伯誕生地』碑の建つ土地が売却されたことに伴い、碑の移設が余儀なくされました。

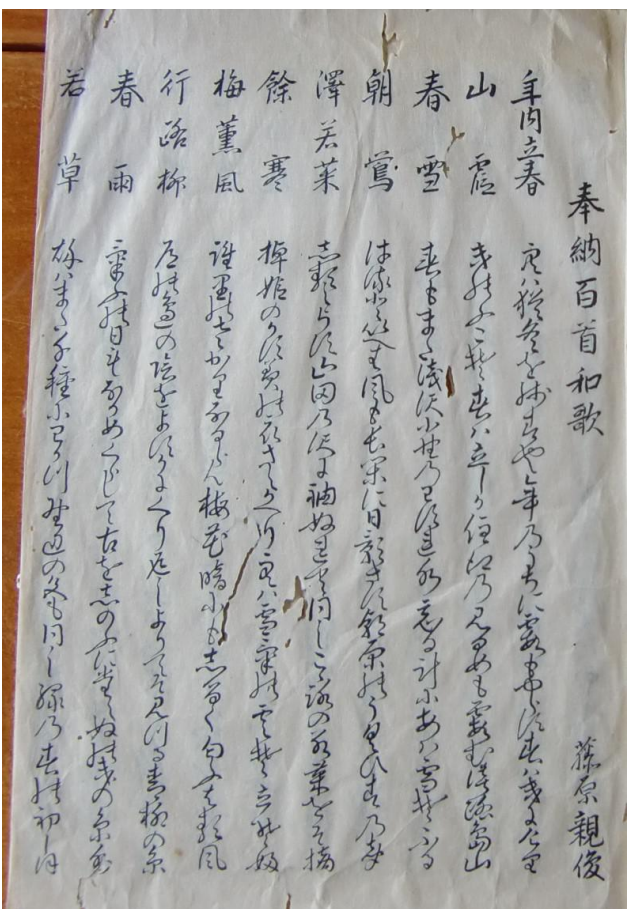
碑の性格上、移設場所について検討しておりました。和田英作は母の実家である川上家に於いて出生したことが当家に伝えられていること、令和3年12月1日、川上家の宅地内に移設されました。



## 【研究ノート】

### (1) 住吉神社（手貫神社へ合祀）の奉納和歌

水之上の手貫神社には住吉神社（現在の今川原公民館のところにあつたが、手貫神社へ合祀）に奉納された約千四百首の和歌が残されています。その内容からは幕末から明治にかけて垂水麓の



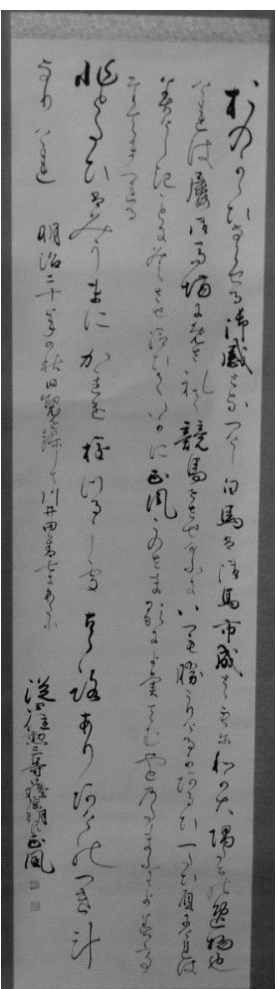
武士たちにより奉納されていることが確認できます。垂水島津家の家臣団は第十代貴澄のころから京都の公家である飛鳥井家に弟子入りして和歌の教えを乞うていましたが、その伝統は幕末まで継続していたことを裏付けるものです。奉納和歌は文学としても、作者の人間相関図を俯瞰する上でも貴重な史料となっています。

《原文を分かりやすく表記…一部》

住吉宮奉納倭歌百首 奉納百首和歌 藤原親俊

年内立春	空は猶冬を残すや年のうちに霞もゆらす春は来にけり
山霞	きのふこそ春は立しが住江の見る目も霞む淡路島山
春雪	春もまた浅沢小埜のわすれ水忘るばかりにあは雪ぞふる
朝鶯	はるといへば風も長閑に日影さす朝原のうぐひすの声
澤若菜	しるしらず山田の沢に袖ぬれて同じころの若菜をぞ摘む
餘寒	棹姫のかすみの衣さへかへり空は雪げの雲ぞ立そふ
梅薫風	誰が里のさかりなるらん梅の花暗にもしるく匂ふはる風
行路柳	道の邊の陰をよすがにくり返しよりてぞ見つる青柳の糸
春雨	けふの日もながめくらして古をしのぶにたえぬ軒の糸水
若草	秋はまた千種にわかつ埜辺の色も同じ緑の春の初しほ

### (2) 高崎正風の書 — 川井田家所蔵 —



垂水の川井田家に伝わる高崎正風の書です。明治二十（一八八七）年、島津久光の病氣見舞いのため正風が鹿児島に帰郷した際、面会に来た垂水の川井田善七に書いて与えたものです。そのことは北里蘭の『高崎正風先生傳記』（私家版 昭和三十四年）にも記述されています。

この書には久光と正風との互いの持ち馬を通じた二人の交流の有様がよく描かれています。また二人の持ち馬が大隅産であることにも触れ、大隅地方は当時から名高い馬どころであったことも分かる史料となっています。

## 【読みやすく表記】

おのが飼いならせる御感と名付けし白馬は、御馬・市成とともにわが大隅だちの逸物なりければ、屢ば御馬場に召されて競馬をさせ賜うに、いつも勝たりけるが、ある日一たび負けにければ御気色



ことに見懲らさせ給いて「いかに正風、この様歌に詠みてむや」  
とのたまうに詠みてたてまつれる

ひとたびは御馬に勝を譲るこそ心ありあけの月となりけれ

明治二十年の秋、旧製を録して川井田善七にあたらう

従四位勲三等藤原朝臣正風

### 【注】

○御感・・読みは「みさととり」か。○御馬・・みうま。久光の馬  
と思われる。○大隅だち・・大隅の産。大隅生れ。○御気色・  
ご機嫌。○ことに・・格別である。

### 【口語訳】・・《鹿児島史料講読会・上園・瀬角》

自分（高崎正風）が（日頃）飼い馴らしている「御感」と名付  
けた白馬は、（殿・久光様の）御馬の「市成」と共に、わが大隅産  
の優れた馬であったから、しばしば馬場に召し出されて競馬をお  
させになったが、いつも（自分の御感が）勝っていたのであるが、  
ある日、一度（市成に）負けたところ、（初めて勝ったことで）殿  
のご機嫌は格別で、そのお姿を見て私が恐れ慎むようにおさせな  
さって、「どうだ正風、この様を歌に詠んだらどうだ」とおっしゃ  
るので、一首詠んで差し上げた歌。

ひとたびは御馬に勝を譲るこそ心有明の月となりけれ

（一度は殿の馬に勝を譲ることこそ臣下としての心映えであり、  
その心は空に懸かる有明の月のように澄んでおります。）

明治二十年の秋、旧製を録して、川井田善七に与える。

従四位勲三等藤原朝臣正風

## 【垂水市史料集（十三）より】

太平洋戦争三年目の昭和十九（一九四四）年二月六日、第六垂  
水丸（定員340名）は沖に長く伸びた棧橋を離れて鹿児島方向  
へ方向転換した時、バランスを崩して転覆事故が起りました。  
現在五四〇名の死亡が確認されていますが、当時は戦時体制下で  
あったためか七十八年を過ぎた今も事故の全貌は明らかになっ  
ていません。

今回より二月六日を前に『垂水市史料集（十三）』（平成七年）  
から体験記の一部を紹介します。

### 『垂水丸遭難に寄せて』① 室屋新七（旧佐多町）

私は中支派遣軍の樁部隊異部隊で隊外酒保を経営していました。  
五年ぶりの帰国でした。昭和十八（一九四三）年十二月二十四日、  
中支江西省南昌県新建県の前線を出発して鄱陽湖から揚子江の九  
江に出て商船で南京まで下航し、対岸の浦口駅から北支鉄道で北  
京に着き、満州から朝鮮へと夜の一人旅でした。天津を通過して  
大沽あたりで、地雷が爆発して私が乗っていた二号車は、河へ斜  
めに転落しましたが怪我はしませんでした。警乗兵が「敵襲があ  
るかもしれないから静かに」と言われましたが別に敵襲もなく、  
かすかな明かりで手荷物をまとめました。四、五時間後、朝鮮行  
きの列車で釜山に行き、大晦日の夜、関釜連絡船に乗りました。  
その船の中では、アメリカの潜水艦の攻撃に備えて救命具の漬け  
方を指導され「只今の水温は十三度ですから出来るだけ厚着をし  
なさい」とのことでした。そして、鹿児島に元旦に着きました。

## 【お知らせ】 — どなたでも「参加ください」 —

毎月第四水曜日午後六時半から、垂水市民館で垂水の郷土  
史や文化財などについて、定例の勉強会を行っています。  
『垂水市史』の読み合わせが基本ですが、資料を持ち寄っ  
ての勉強も行っていきます。また、市内に残る文化財や史跡め  
ぐりなど、現地研修を行うこともあります。

昭和十九年二月六日の前日は季節風が強く荒れた日でしたが、  
当

日は日曜日で穏やかな日でした。戦時中で色々な物資は不足して  
いて統制下でした。私は根占の兄宅に実姉と甥と三人泊り合わせ、  
鹿児島市の姉宅から急いで品物を持ち帰る事で話し合いました。  
姉は疲れているので行けず、甥は友人宅に寄って来るからとい  
事で遅くなってしまふ。その結果私が行くことになり、六日の朝  
五時半ごろ一番バスで出発しました。乗客は十五人ぐらいで、私  
は根占の川元よし先生や魚屋の正夫さんと同席しました。大根占  
のバス停で川元先生が竹屋旅館の奥さんに伝言されるのに、大根  
占からの乗客が多くて車掌さんと呼ばれましたが通じませんでした。  
私がバスから降りて「今日、川元さんは指宿療養所の看護婦  
さんの慰問に行くことになって、大根占で行われる婦人会には出  
席できないから」と伝えてくださいたいとお願いましたところ、「旅  
の情けはありがたい」と川元先生は喜ばれました。先生は根占実  
業学校の先生をされ、また鹿児島県国防婦人会の会長もなさつ  
て、遠く中支の郷土部隊兵士の慰問をされたりしていました。  
当時、指宿療養所は兵隊さんが入院しておられ、従軍看護婦とし  
て働いていた看護婦さんたちを慰問される所でした。バスが  
垂水港に着いて私は最後に降りましたところ、すでに正夫さんが  
乗船切符を三人分買って下さっていました。その当時の棧橋は細  
長く二百メートルくらい沖へ突き出していて、皆、船が着くのを  
一列になって待っていました。川元先生の小包を、私が持つてあ  
げましょうと言いましたが、自分で持つと言われました。「この小  
包は東京に送るのですよ。鹿児島市から送ると早く着くものです  
から。中味は干し大根と花の種子ですよ」と言われたのが最後の  
言葉となりました。

（次号に続く）

【長い棧橋の先から見た垂水の町並み】

